

査（図1：調査B）では、弥生時代から古墳時代の竪穴建物や溝のほか、鎌倉時代の井戸や室町時代の溝や堀が見つかりました。この溝や堀は、宅地や集落を区画する施設と考えられます。またこの調査で見つかった室町時代の堀は、社家町を囲んだ「構」の可能性があります、文明年間（1469-1487）に維持管理を行っていた記録（「置文案」^{おきぶみのあん}（上賀茂神社文書））が残っています。

これらのことから今回の調査では、これまで植物園北遺跡内で多く確認されている弥生時代から古墳時代、平安時代の集落遺跡に関わる遺構や遺物だけではなく、平安時代から江戸時代頃までの上賀茂神社に仕える人々によって形成された社家町に関わる遺構や遺物の発見も期待されるところです。

2 今回の調査について

今回の調査では、室町時代の柱穴や土器を多く含む整地土、江戸時代前半の土坑、江戸時代後半～明治時代の土坑などを見つけました。特に室町時代の整地土は、調査区の東半で確認し（図3・4の赤色の範囲）、江戸時代や明治時代の遺跡で壊されていなければ、調査区全体に広がっていたと考えられます。整地土はにぶい黄褐色の砂質土が用いられており、厚さ



図3 第1面完掘状況（東から）

は30～70cmです。下部構造として拳大～人頭大の河原石が敷き詰められていました。

整地土を除去すると、北西から南東方向の浅い谷状の自然地形が確認できました。しかし谷状地形の範囲には、本来あるべき当時の表土は確認できませんでした。おそらく、この谷部分はほかよりも水が流れやすく、地盤が弱かったと考えられます。整地の際に、やわらかい表土を剥ぎ、しっかりとした地盤を出してから、水が多少入り込んでも地盤が緩まないように石を埋めた後、土を盛り、平らな地面を作り出したのではないかと考えられます。



図4 第1面整地土下部構造の石敷き検出状況(西から)



図5 整地土下部構造の石敷き内土器出土状況(北東から)



図6 整地土下部構造の石敷き内土器出土状況(北東から)



3 まとめ

今回の調査では、当初想定していた弥生時代から古墳時代の集落跡に関わる遺跡は確認できませんでした。しかし室町時代の遺物に混じって、弥生土器や古墳時代の須恵器や土師器などの土器片が確認できることから、この付近にも、弥生時代から古墳時代の人々が生活していたことがわかります。

今回の大規模な整地の発見は、室町時代の社家町の形成過程を考えるうえで、貴重な成果になると考えられます。

(奥井 智子)